

色鉛筆

若き父

之れは本誌に同情篤き某文學士の筆になつたものであります。ありのまゝの記述の中に一つには幼兒發達の記録として、一つには一篇の戀愛文學として深き趣味が充ちあふれて居ります。

(編者)

○八月十九日のお晝の事である。一年九ヶ月になる坊やが、机のほとりに散らしてあつた一枚の中判の洋野紙に、赤と青の振り分けの良鉛筆を振つて、「ジー／＼」(紙聞紙、紙書籍、雑誌、筆、ペン、鉛筆、硯箱、硯、墨等に通ずる坊や獨特の名詞、語源は「字」なるべし)と言ひながら、裏と表とに濫に線を塗りまわした。坊やが色鉛筆を使ふのは、今日が初めてである。第一の「ジー／＼」で赤が出た。不思議さうに見つめて居る。普通の鉛筆の色と違ふのに驚いたらしい。鉛筆に眼をつけて、暫らく見て居たが、今度は反対の端で「ジー／＼」をやる。忽ち青が威勢よく出る。それか

らしばしの間は青の世界で、やがて又赤になり、又青になり、間には普通の黒の鉛筆も仲間にに入る。
 ○この野紙を手に取つて眺め入つて居るうちに、珍らしく何か書いて見たくなつた。朝からの坊やの出来事を、この野紙に書き付けて見たくなつた。
 ○元來自分は書いて残して置く事を好まない。日記も嫌である。忘れる程のものなら自由に忘れてしまひたい。忘れられないものは獨りでに残つてくれるであらう。しかも年と共に之れがおぼろに綺麗に成るのは、猶更あこがれの思ひを増させこそれ。
 ○父の亡くなつた年に、肖像を書齋にかけた事がある。どうも偶像的で符牒的で、忘れともなくする爲めに無理にかけて置くやうな、「思ひ出せ、忘れるな、忘れるな」と自分を强迫する爲めにかけて置くやうな、父に對して何とも云へない濟まない氣がして堪へられなくなつた。之れ以來父の姿は額にかけて置かない事にした。

○それが、何故坊やの記事を書いて見たくなつたのか、自分にも分らない。兎に角書いて見やう。

八月十九日

○腹を悪くして居るので、三度ともパンである。食卓の上に置いてあるゴム製の小羊に、自分のパンを食べさせやうとする。今度は自分の持つて居るセルロイドの達摩さんの頭をパンに擦つけて、可憐さうに達摩さんをジャムだらけにする。その内に酒屋の用達の小僧さんが蟬に糸をつけて持つて來てくれる。其蟬にパンを押しつける。しかし傍に居るトーチャンやアーチャン（坊やはカの發音の代りにアを用ひて居る）やヲバチャンには、決してパンをこんなに強いはしない。

○トーチャンの胸にとまらせた蟬が、だん／＼這つて背中へ來る。坊やはそれを見て「アブ／＼」と呼ぶ。蟬がトーチャンにオンブしたと云ふのである。それを見て自分も急にオンブしたくなつた

と見えて、どん／＼傍へやつて來たけれども、蟬がとまつて居るので、困つた顔をして立つて居る。○アーチャンに抱かれたまゝでジーをする（モツコを坊やはジーと云ふ）。忽ち八九歩立ち退いて、障子につかまりながら、顔をしかめて妙な足つきをして居る。よく見ると、或は拇指で蝮を捕へながら、踵で立つたり、或は踵を上げて指先で立つたりして居る。足にジーがついて居るので、それを氣にして逃れやうと云ふのである。

○アーチャンに抱へられ、トーチャンにもたれて遊んで居た坊やが、右の二の腕をおさへて、しきりに「アーハー」と云つてアーチャンに迫る。見てやると蚊にさゝれた跡がある。フーチャンがチヨイ／＼と搔いてやると、搔かれて居ながら少しこい人さし指でトーチャンの手の甲を軽く搔く。そしてアーチャンとトーチャンとを見較べてはニコ／＼笑つて居る。

○ジャムをつけたパンを小さく切つて、お皿へ入

れて置く、それを取つて樂しさうに食べる時々。
——どうかすると取つて食べる毎に——指にジャムがつく。一々そのジャムを拭いて貰はなければ氣が済まない。食べて居る内、今右の人さし指にジャムがついた。氣に成つて氣に成つて仕方がない。其人さし指を眞直に延ばし、他の指で無格好にパンを握り、アーチヤンの方を見ながら、顔をしかめて、「エーン〜」。

八月二十日

○叔母ちゃんが御仕事をして居る二階へ伴て行くと、窓の竹格子の間から、盛に裁縫の道具を抛り出す。先づヘラが亞鉛の廟に落下して、將に雨後の桶に轉げ込まうとして居る。トーチヤンは庭へ降りて、ニユーツと手を延ばして其ヘラを取つて棒の先へつけて差し上げると、キヤツ〜と悦んで騒ぐ。今度は二尺ザシを格子の間からやつとの事で出して落さうとする。一寸格子につかへて中々墜落しない。とう〜窓の真下に落ちる。下か

らは手が届かない。塀につかかつて取つて坊やに渡す。其爲めにトーチヤン両手と右の肱は眞黒になる。又二尺ザシを落さうとする。今度は後からフレチヤンの牽制運動があるので、落さない様な風をしながら、やはり大に落さうとする。とう〜眞直にトーチヤンの耳をかすめて地上に落ちる。○達摩さんの頭に叔母ちゃんの琴の爪をのせて悦んで居る、丁度加藤清正のやうな形になる。しかしそれをもすぐ庭に抛り出す。抛つたから口でべツ〜とやつて居る。何時何處で誰か睡をしたのを見て眞似をして居るのか、油斷が出来ぬものだと思ふ。

○両手にセルロイド製の起上り小法師を持つて、将に庭に抛り出さうとして居る。あはやとアーチヤンが庭の方から手をかざして留める。くるりと身を翻して、抛らうとした両手で其まゝ頭をおさへて、ヤーツ〜と云つて逃げて行く、やるまいぞ〜と追つかける。やがてアーチヤンの隙を見

て、二つともすさまじい音をたてさせて庭石に叩きつける。そしてアーチャンの顔を見ながら、口を一ぱいに開いて、バーンと云つて笑つて居る。

○廊下を急でかけて来てバタリとのめる。あたりに誰も居ない。居るとすぐ泣出するのであるけれども、顔をしかめてあたりを見まわしながら、「アブー！」蓋しアブーとはアブナイの略である。

八月二十一日

○病氣をしてから非常に乳に親むやうになつた。アーチャンにだつこして、しきりにパイを吸つて居る。其傍でトーチャンが有るか無きかのパイで一生懸命に勧誘する。笑を含みながらナヨコ／＼とやつて來て、きまり悪さうにだかれて、二たなめばかりして逃げて行く。そしてアーチャンのパイに復舊する。圖に乗つてトーチャンは又惡勸めする。今度もやをらアーチャンのパイを離れてやつて來たけれども、初めトーチャンに向つて直線に進んだ方向が、すぐ左へそれる。更に左に、又

更に左に——とう／＼アーチャンのまわりを一周して、フン／＼と軽く意味ありげに笑ひながら、又アーチャンのふところへ——。

○縁側へ反物をならべて風を入れて居る所へやつて來て、いきなり手近にある一樂か何かを庭に捌り出さうとする。トーチャンの注進によつてはせ参じたアーチャンば、先づ他の反物を遠くへ避難させる。其暇を狙つて投げやうとする、アーチャンも去る者、中々隙がない。一步坊やが引けば、一步アーチャンが進む。アーチャンが庭を背中にして右翼を包むやうにすれば、坊やは笑ひながらクルリと左方に轉開する。押しつ戻しつ、包みつ開きつ。チョコ／＼した足取りと、ゆるい足すりとで、軽いリズムをふみながら、三間も四間もならび進んだが、勝算なしと見て取つたが、力任せに反物を座敷の疊の上にバサリ。

○乳母車に乗せて乾査を買ひに行く。昨日の夕方オヌブして通りを歩いた時、六歳ばかりの女の子

が、トキ色の着物を着せた人形を抱いて居るのを見つて、「アイチヤン、ネンネ。アイチヤン、ネンネ。」と云つて何度も振り返り、遂に其あとを慕つて歩かせられた。アイチヤンとは子供の事、ネンネとは繪や彫刻などの子供を意味する。其様子では、人形が欲しくてたまらないらしく見えた。それで買物をすませてから、六寸ばかりの形を買ってやつたら、すぐ其人形をトーチヤンに渡して、「アイチヤン！」と云ふ。つまり「女の子のものは女のお子に達せ」とでも云ひたさうな顔つきである。一旦受け取つて、更らにそれを乳母車に入れて車を押し始めたら、可哀さうに髪の毛をつまんで抛り出すこと二回。止むを得ずトーチヤンが手に持つて歸る事にする。

○手重能で盛に長火鉢の灰をくつて、壘へこぼす、鐵瓶へ浴せる。銅鑑へかける。バラリ／＼とやる毎に、煙がバーツと立ち登る。手重能を取り上げると、有り合せたスプーンで一増烈しくやる。

手も足もつけられない、傍へ近寄る事も出来ない。正に人天に勝つの概がある。アーチヤンが嘆じて、「これをほーっ見て居るには、餘程な勇氣がります」。ふと思ひついて、いつか鎌子の海岸で取つて來た綺麗な砂を出してやつて遊ばせて、一寸安心して居たら、大變。いつの間にかそれを脱脂綿で口を掃除するので、アーチヤンは大汗になる。坊やは大泣きをする、トーチヤンは確かにウロ／＼して居たらしい。

八月二十二日

○朝、トーチヤンは出かけるのである。看物を着換へた様子を見て、すぐ坊やはアーチヤンにオブしやうとする。勢の定まつたのを見て、アーチヤンも外出と觀念する。トーチヤンが包みを拵へたりして居る間に、アーチヤンは「ブーを持つていらつしやい」と坊やに云ひつける。チヨコ／＼と歩いて行つたが、何處でさがして來たか、自分

の帽子を両手で頭にのせて、變な冠り方をして歸つて来る。オンブして玄關まで出ると、しきりにブー／＼と云ふ「坊やはブーを冠つたんぢやないの。」と云ふけれども中々聞かない。見るとトーチヤンの帽子を指してブー／＼と云つて居るのである。其心づけにあづかつた帽子を嬉しく冠つて、やがてお揃ひで電車まで行く。トーチヤン丈け分れて電車に乗つたので、變な顔をして「トチヤン／＼と呼んで、お出で／＼をして居る。アーチヤンは狂熱的の勇氣を躍して一間ばかり電車と競争する、キヤツ／＼と聲をあげ、體をゆすり、アーチヤンの肩を叩いて悦びに悦ぶ。其うち電車とぐん／＼離れてしまふので、坊やの顔は急に曇つて来る。アーチヤンは身を翻へし路を轉じて、何とかしきりに坊やに話かけながら、坊やの氣をまぎらさうとして居るらしい、其姿が小さく夢の國のやうに電車の中から見える。歸つてから聞くと、すぐ次の電車がやつて來たら、忽ち聲をあげて「ト

トチヤン／＼と呼びかけたさうである。この電車にもトーチヤンが乗つて居るものと信じて居るらしい。

○誰が敷へたのか、鼻をつまんで「ミン／＼」と云ふと、つまつたやうな鼻音が旨く出るので、蟬の泣聲に一寸似て来る。坊やは始終自分の鼻や、トーチヤンやアーチヤンの鼻をつまんでは、ミン／＼をやつて居る、人形の鼻、假面の鼻はまだしもある。机の上に立たせたら、釣りランプのねぢに手を延ばして、心をねぢ上げたり引込ませたりして、「ミン／＼」とやつて居る。拇指と人さし指とでつまむものは、總て坊やにはミン／＼である。今度はこの新發明のミン／＼にも飽きて、石油壺に雨手をかけて、目茶苦茶に動かす。油が漣立つて、さら／＼とゆれて、稻妻のやうな波が立ち騒ぐ。それを見て、ザー／＼と云ふ。ザーとは湯槽の湯、お湯に入る時の玩具や道具、海、河、水たまりなどに通する坊やの言語である。今夜か

ら又ザーの仲間が一つ殖ゑる。

○九時頃アーチヤンと床に入る。何か氣にいらぬ事もあるのか、それとも睡くなつてものが分らなくなつたのか、座つたり、起上つたり、寝轉んだりして、いろ／＼な文句を云ふ。ブー／＼（ブーとは帽子の外に、呑むお湯をも意味する）と云つて見たり、ウマとパンと一緒にしてマン／＼と云つたりして、中々寝つかない。そこでトーチヤンが離れから出張して、お尻の邊を轉くビシャ／＼打つて「ネンネツ／＼」と威嚇する。忽ちアーチヤンにしがみついで、目をまち／＼させて、バイを吸つて居たが、すぐすや／＼と寝入つてしまふ。今更のやうに小言がよく利く事を感心する。三時頃に目をさまして、ひどく怒つて泣き出す。寝つく時に傍に居た筈のトーチヤンが居ないので、怒つて泣いて居るのかしらと思つたので、アーチヤンはしきりに離れたトーチヤンを呼ぶ。トーチヤンは何事が起つたのかと、びっくりして目

を醒まして、眞暗な部屋を手さぐりにさまよひ出る。忽ち机の角で膝頭を打つ、障子にした、か頗る。打ちつける。つぶさに艱難を嘗めて、やつとのことで坊やの隣に侍べる。「坊や／＼」と慰める積でやさしく聲をかけたら、一属ひどう怒り出して、足をバタ／＼やつて、盛にトーチヤンを踏む蹴る。寝る時の折檻を思ひ出したものらしい。案に相違して、さん／＼面目を失つて、ほう／＼の體で逃げのびる。離れた廊下に、外して立てかけてあつた障子が四枚ばかり、暗がりにすさまじい音をたてゝ倒れる。トーチヤンを追拂つたら、すぐ寝ついたさうである。

八月二十三日

○お晝頃、郵便を出したり、買物をしたりするついでに、坊やを乳母車に乗せてつれて行く。車にはホロをかけ、トーチヤンは洋傘をさして行く。機嫌である。菓子屋の前に車が留つたら、チラリ

と何か目に入つたと見えて、車の中で立ち上らうとする。急いで注意をしてすぐ店を出て来て、絶えず車を動かして注意を他の物事に向かせやうとする、やがて買物が済んで、車を押して歸途につく。十間も來ると急に泣き出す。車を急がせたり、いろいろな事を言ひかけたりしても、どうしても聞かぬ。何か注意をすれば、益、怒つてそり返つて泣く。この時坊やの帽子は眞深になる。家までは猶五六丁はある、進退こゝに谷まつたので、止むを得ず日蔭に車を入れて、坊やを抱き起すと、有らん限りの聲を出して赤くなつて怒つて泣く、體は弓なりにそり返へる。どう云ふわけか、兩手で帽子の縁をつかんで、ぐんぐんと引く、帽子はだんくめり込んで、あわやと思ふ間もなく鼻が隠れてしまふ。猶深く帽子を引かうともがく、あまり大きくもない帽子である、鼻も口も隠れてしまつては大變である。事こゝに至つてはトーチヤンも多少夢中の氣味、急いで坊やの両手を退けや

うとしても、しつかりおさへて中々離さぬ。もう口まで來かゝつて居る、力を入れて坊やの左の手をグイと引く、離れる、左の手で再び帽子をつかまない内にと、突嗟、右の手をもグイと引く、引いた手を閃めかして急いで帽子を取る。水色の繻子の裏地は汗にぬれて中々脱げないのを、無理やりに乳母車の中にかなぐり捨てる。扱て横抱きにしていろいろなだめて見たけれども、素よりかう成つてはトーチヤシの勢力範囲のものではない。ひたすら怒り泣いて、車には乗らず、近處には知り合ひもなし、そろゝ人も立ちかゝる。泣くのを構はず急いでつれて歸るより、どうしても外に道はない。左の手に坊やをかゝへ、右の手に洋傘を持ち乍ら乳母車を押して、無二無三に人通りをかけ抜ける。乳母車の方向轉換の鈍さを巧みに制御して、日中と云ひても人の行來の多い通りを急ぐには、非常に右の手に注意と筋肉の力とを集めなければならぬ。町の両側の家々では、アレ

と云つて居るらしい。泣きつけの坊やは、そり返へりくしてづるつこける爲めに、着物は胸まで捲くれ上る。時々右の手の管轄の車と洋傘とを離して、坊やの體をすり上げるけれども、益々泣いてそり返るので、發達の遲鈍な左の手一つでは、素より支へ切れる筈がない、すぐに又する下がつて遣る瀬がない。トーチャンの態度もかう成つては最早やシドロモドロである。思ひついたやうに洋傘を車の中に投げ込んで、少し右の手が樂になる。小さい頭を日に曝らしては大變である、洋傘はさす手がない、帽子には少なからず懲りて居る。頭をグイと自分の顔に引よせて、トーチャンの帽子のツバで蔭を拵へてやる。途中で二三の路行く人に同情されて、車を押しましやうかと云はれただれども、却つてこの方が早く家に着くらしいので、好意を有りがたく受けて御断りして急ぎに急ぐ。一つには辻褄の合はない人と一緒に走つて、騒動の輪廓を異様に大きくするにも忍びな

かつたからである。やつとの事で家が見える。四五軒手前のミルクホールに車を押しあつて、扱て兩手でかゝへて家へ飛び込む。坊やを入口に居た叔母ちゃんに渡して、途中の光景を歴々と目の前にくり返へしながら、心痛と慚愧と落着の安心とに心がもつれてミルク屋へ引返へす。ミルク屋の前では近所の子供が十人ばかり車を圍んで群がつて、今彼等が見た窮迫した緊張した光景を物語つて居る。疲労し切つた自分の顔を見て口々に「どうしました?」「大變ね!」「どうしたの?」「泣いて居て?」と可愛い慰問をしてくれる。心配して歸つたら、アーチャンに抱かれてバイの最中である。トーチャンの顔を見たら、きまり悪さうに笑つてもぢくしながら傍へ寄つて来る。今日の事件も發端はトーチャンの買物について、何か氣にさわつたか、不公平な事が有つたらしい。體にはなん等の異状もない。全く坊やに済まなかつた。